BOOK X — 見えざる戦争

第07章 — 安全な場所はない

01 — 彼を待つ場所

三人目の男が入口に立ってから二十分近くが経った頃、建物の管理責任者が椅子を持ってきた。男は断った。自治体の係官の一人は中へ入り、もう一人はメモを書き込んだ紙を手に歩道に残った。

通りの向かいでは、ロイがベンチに座り、右腕をコートに預けていた。入口の上の照明が、宿泊の申請を受け付ける時間を記した看板を照らしていた。通りを渡ることさえできれば、まだ申請には間に合った。

二人の子供と衣類の入った鞄を持った女性がやって来た。女性が係官に書類を見せると、彼は中へ入るよう促した。何か手続きが変わったのかと尋ねられ、彼は調査を行っているのだと答えた。

ロイは子供たちが建物の中へ消えていくのを見ていた。男たちが何をしに来たにせよ、女性の入館を妨げはしなかった。

それを理由に女性の後に続いてもよいかと考えていたとき、若い男が畳んだ毛布を何枚も抱えて入口から出てきた。通りの少し先に停められた小型車両まで運ぶよう頼まれたらしい。間もなく、彼は次の荷物を取りに戻ってきた。

その頃にはロイは決心していた。慎重に立ち上がり、その場を離れ始めた。

最も気がかりだったのは、身元を見破られる可能性ではなかった。入所を受け付けた責任者から係官たちが彼の名前を得れば、ロイを助けた人物の名前まで突き止めることになる。その人物には、助けた後にならなければ、それが何を意味するのか知るすべがなかっただろう。

かつてロイは、自分の存在を明らかにすれば問題は解決すると信じていた。岡京に到着してから始まった審理の初期には、法が適用されるべき人間であることを立証するよう求められた。今では複数の当局が彼の存在を認めているというのに、その存在を知られることが中にいる人々にどんな影響を及ぼすか、考えずには建物に入ることもできない。

通りの端に、カウンターで温められる容器入りの食事を売る店があった。ロイは食べ物を買った。店員は箸を差し出したが、彼の腕の様子を見てスプーンに替えた。

ロイは礼を言った。

店員は容器の蓋を外しておくかと尋ねた。

「お願いします」

窓際の狭いカウンターで食事を取った。他に二人の客がいて、一人は市営交通機関の制服を着ていた。二人は夕方以降の運行変更について話していた。

上層地区のいくつかのターミナルでは、特定の種類の切符が発行されなくなっていた。代わりのものは翌朝には利用できる見込みだった。制服の男によれば、機械自体は動いているが、認証システムの変更に予想以上の時間がかかっているとのことだった。

「古い方をそのまま使わせればよかったのに」と、もう一人の客が言った。

「俺たちもそう言ったよ」

ロイは食事を終え、店員にスプーンを返した。

外では、建物の窓に通りを行く車の明かりが映り始めていた。襟を立てたコート姿の男を誰かが特に気に留めるほどには、まだ寒くなかった。

ロイは電話を取り出した。リアンは次の診察の時刻を伝え、それまでにどんな変化があれば助けを求める必要があるかも説明してくれていた。言われたことはすべて覚えていた。

問題は、朝まで待つことのできる場所を見つけることだった。

医療協会へ電話することを考えた。レイチェルから別の伝言があるかもしれない。だが以前は、そこにいる理由を説明することなく問い合わせができた避難施設にも、もう電話はなかった。協会の電話番号が、今や調査対象の番号に含まれているかどうかも分からない。

ロイは電話をしまった。

交差点の公共スクリーンに、宿泊施設の臨時調査についての告知が映っていた。告知によると、措置は自治体の支援事業に参加する施設が保有する記録の正確性を確認するためのもので、支援を必要とする人々の受給資格に影響するものではないという。

告知の下には、問い合わせを受け付ける事務所の電話番号があった。

ロイはそれを読んだ。かつてなら、この種の告知に関心を持つのは、そこに含まれる情報のためだけだっただろう。今は、どの言葉が省かれているのかを確かめるという、もう一つの目的を持って読んでいた。

記録の正確性を確認する理由は、どこにも記されていなかった。

ロイは地区の下層部へ向かい続けた。背後のどこか、彼が入らなかった入口の先では、二人の子供を連れた女性が眠る場所を割り当てられている頃だろう。

その場所を手放すよう求められないことを、彼は願った。

02 — 日常への調査

調査を承認する指示が自治体の連絡事務所に届いたのは午後四時を少し過ぎた頃だった。デレン大尉は上層地区で行われている活動について説明を求めた際、その写しを受け取った。

指示は市民記録の正確性に責任を負う当局に宛てられていた。ロイ・バッティの名前はなかった。大尉に渡された写しには含まれていなかった付属文書に、不整合を捜索担当の事務所に報告する条件が記されていた。

彼は付属文書を求めた。

連絡係官は、司令部に報告する際の基準なら入手できるが、自治体の事務所には別の指示が出されていると答えた。

「誰の作戦なんだ？」デレンは尋ねた。

係官はためらった。調査は国家の連続性に関する規定に基づく権限で行われており、政府のある部門から自治体に協力が要請されたのだと説明した。

「どの部門だ？」

係官は机の端末を調べた。捜索の拡大に責任を負う部門の名称と、指示が伝達された経由先の文民事務所の名称が判明した。どちらもデレンの手元の確保命令書には記されていなかった。

デレンはヴェイルに会いに行った。

ヴェイルは、作戦の進捗について改訂版の評価を作成するよう指示された二人の職員と部屋にいた。画面には捜索開始以来、照会が行われた施設の数を示すグラフが映っていた。

終点に近づくにつれ、線の勾配は急になっていた。

デレンは二人の職員が立ち去るのを待ってから、ヴェイルに指示書を見せた。

「宿泊記録まで調べさせている。何かを見つけたら、彼らが何をするのか把握していますか？」

ヴェイルは、対象者がいる可能性を示す記録は適切な部隊に送られると説明した。その後投入される人員の責務に変更はないという。

「それが対象者の病状を示す記録だったら？」

「他の情報と併せて評価する」

デレンはまだ画面に映っているグラフを見た。追加の照会によって、M-08が関わった事案以降のロイの確かな目撃情報は得られたのかと尋ねた。

ヴェイルは、まだ情報を精査していると答えた。

大尉は医療支援に関する別の提案を準備していた。回収を行う人員のために医師を待機させてほしいと要請するつもりだった。しかし今は、人員が到着する前に対象者が治療を受けられなくなっていたら、その医師に何ができるのかと考えていた。

「負傷した人間が最も行きそうな場所を捜索しているんです」と彼は言った。

「合理的だと思うが」

「そこで何を起こしたいのか分かっているなら、合理的でしょう」

ヴェイルは画面から目を離した。作戦の目的は、配置された人員に抵抗できる能力を繰り返し示した対象者の身柄を確保することだと、デレンに改めて言い聞かせた。捜索拡大に責任を負う当局は、彼を発見する可能性を高めるよう指示されている。発見後に何をするかを決定する責任までは負っていない。

その説明は、デレンに渡された文書と矛盾しなかった。ここ数日、次の人間の責務が始まる直前で自分の責務が終わる人々から受けてきた説明とも、矛盾しなかった。

彼は、提出済みの提案が検討されるまで、司令部による医療情報の取得に制限を設けられないかと尋ねた。

ヴェイルは、司令部はまだ民間医師から診療結果を受け取っていないと答えた。

「受け取る前に、それをどう扱うかを決めておきたいのです」

ヴェイルは文民局長に提起する問題の中に、その提案を含めることを了承した。既存の取り決めを変更する権限はデレンに与えなかった。

宿泊施設では、自治体の係官が名簿を自身の事務所の情報と照合し終えた。二件の不一致が見つかった。一件は三週間前に退所した男性のもので、もう一件は滞在中に市民登録が変更された女性のものだった。

どちらもロイとは何の関係もなかった。

三人目の男は、その晩、登録書類を持たない者が来なかったかと尋ねた。施設の責任者は、そのような人々が時折入口に来るものの、事情を確認する間、仮入所の手配をすることは可能だと答えた。

「今日は来ましたか？」

責任者は名簿を確認した。そのような者はいなかった。

男は礼を言い、端末に記録を入力した。

調査が終わると、責任者は翌日も自治体の事務所に名簿を送る必要があるのかと尋ねた。係官は、別の要請が届かない限り必要はないと答えた。

彼女は男たちが去るのを見送った。それから、洗濯設備の使い方を教えてくれる人を待っていた、子供連れの女性を探しに行った。

司令部では調査完了の記録がなされた。該当する人物は発見されなかった。

中に入らないと決めた人物を記録する欄は、報告書にはなかった。

03 — 医師の住所

診療所を閉めようとしていた少し前に、リアンはイマニから電話を受けた。病院の医師であるイマニは、追加の検査に必要な設備を持っているかもしれない小規模な診断施設の同僚と話したという。患者の名前は伝えていなかった。

「明日、検査の手配はできますか？」とリアンは尋ねた。

「できると思うそうです。何を測定するのか伝える必要がありますが」

二人は検査について話し合った。ロイの状態に関する疑問のいくつかは、日を追って得られる測定値の差を観察すれば答えが得られる。他には、その小さな診療所も診断施設も、彼のような特殊な既往歴を持つ患者には使い慣れていない機器を必要とするものがあった。

イマニはロイが病院の患者だった期間の記録を保管していた。彼の許可を得て、関連する部分を提供するつもりだった。

「他の誰かからも、その記録を求められましたか？」リアンは尋ねた。

「直接には」

イマニは、研究棟に関する追加の照会が病院の管理部門に届いていると説明した。照会は治療を担当していた医師たちに宛てられたものではなかった。詳しい説明を求めると、要請の対象は特定の医師が保有する記録ではなく、施設が保管する記録だという回答があった。

「でも、その二つが別々の記録だとは言えないんです」と彼女は付け加えた。

リアンには分かった。治療中に収集されたデータは、エイドリアンが答えを出そうとしていた実験上の疑問の一部を生んだものだった。どの部屋で収集されたかを突き止めただけでは、研究に属するデータと患者に属するデータを区別できないかもしれない。

二人は次の検査に必要な資料を医学的な根拠に基づいて選ぶことにした。

電話の後、リアンは翌日の記録を入れておく引き出しからロイの用紙を取り出した。負傷について尋ねたいことがいくつかあった。用紙の下の方に、右手に関する記述があった。診察の最初には指示された動作ができていたが、少し後で同じ動作を求めた際には、同じ程度まで行うことができなかった。

重傷を負った患者に、同様の差が現れるのを見たことはあった。異例なのは、動作ができたとき、彼がなおも発揮できる力の大きさだった。

帰る前に、ロイは手を動かす練習をすればよくなるかと尋ねていた。リアンは、どうするべきかを勧めるにはまずどの組織が関係しているかを明らかにする必要があると答えた。それまでの間、自分の意思で最後まで行えない動作を、力を使って完遂しようとしないよう求めた。

彼は理解しているようだった。

しかし次の診察までに彼が置かれる状況が、その助言に従うことを許すだろうかと、リアンは思った。

八時、受付係が診察室に戻ってきた。階下に二人の人物が来て、建物の利用について誰かと話したいと言っている。地区内の施設を調査している当局の代表だと名乗ったという。

「診療所に何を求めているのか言いましたか？」

「まだです」

リアンは階下へ行った。訪問者の一人は自治体の職員だった。もう一人は、国家の連続性に関する照会を担当する部門に配属された係官であることを示す身分証を提示した。彼は診療所が医療協会の紹介制度に参加しているかと尋ねた。

彼女は参加していると答えた。

続いて彼は、過去七日間に、公的施設で治療を受けられなかった人々について協会から紹介があったかと尋ねた。

「治療を受けられなかった、という言葉の意味によりますね」と彼女は答えた。

男は一通の書簡を取り出した。その文言は、別の場所で経験した何らかの困難を理由に医師の診察を求めた患者なら、ほぼ誰でも含まれるほど広範だった。

彼女は二度読んだ。

「個々の診療記録を調べる権限は得ているのですか？」

男は、政府の作戦に関連する情報を保有している可能性のある施設を特定するため、予備的な照会を行っているのだと説明した。その晩、診療記録の提出は求めなかった。

リアンは書簡の写しと、その当局に連絡できる電話番号を残していくよう頼んだ。

男はその通りにした。去る前に、通常の診療日を尋ねた。

「診療時間は扉に書いてあります」

男は礼を言った。二人の訪問者が去ってから、受付係は翌朝の予約を取り消さなければならないかと尋ねた。

リアンは書簡を持って上の階へ戻った。

「いいえ」と彼女は言った。「これを理由にはしません」

書簡には検査を取り消すよう求める指示はなかった。書簡を持参した男たちが、次にどのような状況で訪れるのかについても何も示されていなかった。

彼女は協会に電話し、法的な助言を求めた。一般の問い合わせを担当する職員はすでにその日の業務を終えていたが、ミンはまだ事務室にいた。

法律顧問は話を遮らずに聞いた。リアンが話し終えると、書簡の写しを送るよう頼んだ。同様の質問が協会にも寄せられており、政府の照会の範囲について検討中だと説明した。

「明日、診察に来る患者がいるんです」とリアンは言った。

ミンは名前を尋ねなかった。

「予約を変更しなければならない医学的な理由はありますか？」

「いいえ」

「それなら変更する理由はないと思います。別の要請が届いたときに、どう対応するかを相談しましょう」

会話の後、リアンは窓辺へ行った。下の通りは静かだった。この建物を診療所に選んだ理由は、交通ターミナルから来やすいことと、歩行に困難を抱える人でも入口を利用できることだった。

その同じ入口がこれほど容易に監視できることなど、考えたこともなかった。

04 — 留まる権利

リアンから医療協会への電話が入る前に、レイチェルは宿泊している部屋へ戻っていた。夕方からエイドリアンの陳述書の写しを読んでいた。それはロイから届いた伝言の隣に置かれていた。

テーブルの上には、二種類の情報があった。一つは、政府が存在を認めながらも自由を認めなくなった男に関する情報。もう一つは、政府が設立しながらその活動を説明する義務を負わなかった施設に関する情報だった。

前者にさらなる注意を引くことなく後者について質問することが可能なのか、彼女は確かめようとしていた。

部屋の使用を手配してくれた女性が扉をノックした。建物に住む全員に送られてきた通知を渡しに来たのだ。所有者は居住者の氏名を確認し、その中に公的機関を通じて宿泊の手配を受けた者がいるかどうかを明らかにするよう求められていた。

レイチェルは通知を読んだ。

「私から何か必要ですか？」

「今夜は何も。見ておいてもらおうと思っただけです」

彼女は女性に礼を言った。扉が閉まると、再び腰を下ろした。岡京に来る前から持っていたものは、この部屋にはほとんどなかった。病院から持ち出したものは、店に行けば代わりが手に入るようなものではなかった。それでも椅子の背にコートを掛けることや、朝カーテンを開けたらどこに光が差すかを知っていることに慣れていた。

いつの間にかこの部屋を、帰ることのできる場所と考えていたのだと気づいた。

レイチェルはミンに電話した。

法律顧問はまだ協会にいた。その通知は地区内で配られた他のいくつかの通知と似ていると説明した。所有者に代わって通知に関する陳述をしないよう助言した。レイチェル個人に情報提供の要請が宛てられた場合は、文言を検討できるという。

「私に退去を命じることはできるのですか？」

「あなたが説明してくれた通知には、そのような命令はありません」

レイチェルはその違いは分かると答えた。

「でも今となっては、違いがあるのか分かりません」

ミンはしばらく黙っていた。その晩、正当にいることを許されている場所から、自分や他の誰かを移動させる必要があるのかと考えている人々から、複数の電話を受けていた。政府はまだその誰にも退去命令を発する必要すらなかった。

「回答を受け取っていないからといって、その部屋を手放さないでください」と彼女は言った。「あなた自身が留まれないと判断するなら、話は別です」

レイチェルはテーブル上の伝言に目をやった。

自分宛てに誰かから電話がなかったかと尋ねた。

ミンはその後の電話はないと答えた。リアンとの会話には触れなかった。あの情報は医師の法律顧問として得たものであり、医師は患者の身元を明かしていなかった。

「朝、また電話します」とレイチェルは言った。

電話を置くと、封筒から陳述書を取り出した。エイドリアンは、過去の研究と国防事務局内の部門を結びつける参照情報がどこに由来するのかを記していた。その部門が特定の生体試料を受領したとは主張しないよう注意を払っていた。現存する記録で立証されるのは記録の移管であり、移管後にその記録が何に使われたかではなかった。

彼女は、病院で使った試料と、エイドリアンには説明できない反応を見せた試料との差について考えた。かつての研究が民間施設に課されるものとは異なる条件下で実施されていたのなら、彼らが新しいと考えていた疑問のいくつかは、以前にも提起されていたかもしれない。

病院の装置なしで、どれほどの作業を再現できるのかは分からなかった。かつてその装置を保有していた人々が、再び彼女に使わせることを許されるのかは、なおさら分からなかった。

レイチェルは端末で空のファイルを開いた。実験結果をコピーする代わりに、結果に至るまでの疑問を書き始めた。測定を繰り返した理由、観測した差、そしてその差から導くのに都合のよい結論に、あえて飛びつかなかった理由を記した。

その部屋では新たな実験はできなかった。

しかし、彼女の書いているものを読む誰かには、次に何を実験すべきか分かるかもしれなかった。

書く手を止めたとき、ほぼ一時間が過ぎていた。テーブルの上方の窓は暗かった。廊下では通知を届けてくれた女性が、別の居住者と話しているのが聞こえた。

レイチェルは翌晩もそこに留まるか、まだ決めていなかった。

それでも作業を続けた。

05 — 外出の許可

翌朝、地方施設でM-06は、民間医師の診察を受ける許可を求めた要請が医療部門へ回されたと告げられた。十時に診察の予約が手配されていた。

彼女は診察へ向かった。医師は以前にも会ったことのある人物だった。彼は座るよう促し、この施設では対応できない医学的な必要が何かあるのかを判定するよう求められたと説明した。

彼女は、それは自分が判定を求めたことではないと答えた。

医師は彼のもとへ送られてきた要請書を見せた。文書は二つあった。一つは彼女自身の問い合わせで、もう一つは係官が予定されている診察の目的を記入した書式だった。

目的は、追加で必要となる医療の評価と記されていた。

「あなたがこれを書いたのですか？」と彼女は尋ねた。

「いいえ。私が確認するよう求められたことです」

彼女は書式をもう一度読んだ。医師が、この施設には彼女が必要としそうなあらゆる検査を行うための装置がそろっていると結論づけることも可能だった。もしそう結論づければ、決定に責任を負う係官は、彼女が尋ねてもいない問いへの答えを得ることになる。

「ここで診察を受けることに異議があるわけではありません」と彼女は言った。「どの医師と話すかを、自分で決められるようになりたいのです」

医師は書式をテーブルに置いた。

施設で行われた検査の間に、検査を担当した人々を信用できなくなるようなことが何かあったのかと尋ねた。

「いいえ」

「では、別の医師に何を尋ねたいのですか？」

彼女は路面電車のホームでの出来事を思い返した。自分に与えられた指示に従えば、一人の男に何が起きるかを目の当たりにしていた。彼女は男を行かせた。男の身体の状態について彼女が下した判断は、作戦を担当する係官たちの間で議論された。しかしその判断を下すことが彼女自身にとって何を意味したのかは、どの議論でも取り上げられなかった。

「何を尋ねるかはまだ決めていません」と彼女は答えた。「そこへ着いてから決めたいのだと思います」

医師はしばらく彼女を見つめた。

「民間の診療所を受診することを妨げる医学的な理由はない、と書くことはできます。それで十分かどうかは分かりませんが」

彼女はそう書いてほしいと頼んだ。

医師はその通りにした。彼女が部屋を出る前に、所見の写しを渡した。

廊下ではM-04が自分の診察を待っていた。彼女は医師が了承してくれたことを伝えた。

「民間の医師は見つかったのか？」と彼は尋ねた。

「まだ」

「どうやって探すんだ？」

彼女は、他の人と同じ方法で探せばよいのだろうと答えた。それまで、誰かが医師を手配してその人物を診察させるのでない限り、人はどうやって医師を見つけるのか、考えたこともなかった。

M-04は端末を取り出し、地区で利用できる医療サービスの一覧を見せた。前の晩に入手したもので、自治体が一般向けに公開している一覧だった。

「電話できる番号が載っているものもある」と彼は言った。

彼女は礼を言った。

管理事務所で、彼女は所見を提示した。職員は内容を調べ、施設での任務から一時的に解放されることを求めているのか、それとも施設外の機関を利用する許可を求めているのかと尋ねた。

「必要なら、両方です」

職員は、施設にいる必要がない時間を限定的に設けることは可能だと答えた。治療を受ける許可は別の問題であり、彼女の任用条件を所管する事務所へ要請を回さなければならなかった。

彼女は、施設にいる必要のない時間に民間施設へ行くことを妨げるものが何かあるのかと尋ねた。

職員は所見を再び見た。

指示を受けられる状態を維持し、指定時刻までに戻ることを条件とすれば、職員に特定できる禁止事項はなかった。医師が医学的理由による行動制限を勧告していないことを記録した。人員の投入が必要になれば、許可された時間が短縮される可能性があると警告した。

彼女はその条件を受け入れた。

共用室へ戻る途中、施設の入口を見下ろす窓の前を通った。ここに来て以来、その窓からはいつでも通りが見えていた。以前にも、どこかへ運んでくれる車を待ちながら眺めたことがあった。

正午少し前、彼女は外へ出た。入口の職員が外出時刻を記録し、戻らなければならない時刻を念押しした。

どこへ行くつもりなのか、誰も尋ねなかった。

通りを渡れば、何か違うものを感じるだろうと思っていた。実際には、通りは窓から見ていたときとほとんど変わらなかった。配送車が歩道の一部を塞いでいた。彼女はそれが移動するのを待ち、歩き続けた。

この地区に来て以来初めて、旅の行き先には、彼女の到着を待つよう指示された人がいなかった。

06 — 待合室

ロイは夜の残りの時間を、交通施設の一般に開放されている区画で過ごした。終便は午前零時を少し過ぎた頃に出発したが、朝の始発便に乗るつもりの乗客が何人か残っていた。職員が建物内を回り、どの扉を閉め、どの扉を開けておくかを伝えていた。

ロイは少し眠った。目を覚ますと、腕が置いたはずの位置にはもうないような感覚があった。見下ろしてみると、腕は動いていなかった。

その感覚が薄れるまで、座席に留まった。

診療所に着いた頃、受付係は午前中の予約の書類を並べ終えていた。彼女はロイに気づき、前日座った場所に腰を下ろすよう勧めた。部屋には他に二人いた。一人は端末で何かを読み、もう一人は看護師と静かに話していた。

リアンが彼を診察室に呼んだ。昨夜はどこで過ごしたのかと尋ねた。

彼は答えた。

「眠れましたか？」

「少しは」

リアンは記録した。それから、一部の検査は別の施設で行えるよう手配したと伝えた。彼が同意するなら、同行するつもりだった。詳細を話す前に、知っておくべきことがもう一つあった。

前の晩に渡された書簡を彼に見せた。

彼は最初の段落を読んだ。それ以降を読むには、さらに時間がかかった。読み終えると、紙をテーブルに置き、男たちに何を話したのか尋ねた。

「協会から患者の紹介を受けていると。あなたの名前は聞かれませんでした」

「いずれ聞いてくる」

「そうかもしれません」

彼は彼女を見た。

リアンは、協会の法律顧問が照会の範囲を明らかにしようとしていると説明した。診療記録は何も提供していない。訪問のことを伝えたのは、検査を続けるかどうか判断する際に、彼が考慮したい事情かもしれないからだった。

「私に出ていってほしいのですか？」と彼は尋ねた。

「あなたを診察したいのです」

彼には返答が難しかった。彼女が言うだろうと予想していたことはいくつかあったが、その言葉は含まれていなかった。

彼が書簡を読み返す間、彼女は待った。

男たちがその朝に戻ると思う理由は何かあるのかと、彼は尋ねた。いつ戻るかについては何も知らされていないと彼女は答えた。政府が捜索している人物が自分だと知っていたかと、彼は尋ねた。

初めての診察に来る前からそうではないかと考えていたと、彼女は答えた。彼が既往歴について提供した情報から確認することができたのだという。

「聞いてくれればよかったのに」

「診察を始めるには十分な情報がありました」

彼はテーブルの上の機器を見た。部屋の隅には、彼女が右手の反応を調べたときに座っていた椅子があった。機器も椅子も、前日の午後から何一つ変わっていなかった。病院の人々が彼への治療を続けるうえでいかなる困難に直面したかは知っていたが、それがこれほど早く、都市の別の地区にある何の変哲もない部屋まで追ってくるとは思わなかった。

「続けたい」と彼は言った。

二人は腕の診察から始めた。前日にはできた位置の変更が、今は多少の困難を伴わなければできないことをリアンは確認した。可動範囲が狭まったことより、目覚めたときの腕の感覚についての彼の説明の方が気がかりだった。

診断施設へ電話し、イマニが連絡を取っていた医師と話した。医師は予定より早い時刻に二人を受け入れることに同意した。

出発の準備をしていると、受付係が来て、建物の入口に係官がいるとリアンに伝えた。別の診療所の責任者の一人と話しているという。もう一人の係官は階段へ通じる通路に入っていた。

ロイは開いた扉を通じて会話を聞いていた。

コートを着た。

リアンは受付係に、二人のどちらかが彼女の診療所への立ち入りを求めたのかと尋ねた。求めていないとのことだった。リアンは午前中の予約についての問い合わせへの対応を続けるよう伝えた。

ロイの方へ振り向くと、彼は窓辺に立っていた。

「窓からは出られませんよ」と彼女は言った。

「分かっています」

彼は歩道を見下ろしていた。係官の一人が車両の傍らに立っていた。入口へゆっくり歩いていた患者が立ち止まり、彼に何かを尋ねた。係官は彼女を通すため脇へ退いた。

ロイは、軍が病院へ立ち入る権限を得た後、病院の人々に何が起きたかを思い返した。彼らはどうするべきか考える時間をほとんど与えられなかった。自分のために、リアンにも同じ決断をさせたくはなかった。

「別の予約を取ってもらうことはできますか？」と彼は尋ねた。

「できます。でも、あなたには今日の検査が必要です」

彼はまた連絡すると伝えた。リアンは、自分を主治医にしてほしいと彼が頼んだことを思い出させた。別の電話番号を渡すだけで、その責任を果たしたことにはならないのだと。

しばらく二人とも黙っていた。

やがてリアンはテーブルの上の鞄を取った。既に彼と一緒に建物を出る手はずを整えていたのだと言った。係官が話をしたいなら、医師として応じるつもりだった。情報の提出を求める権限が確認されない限り、他の人間の情報を提供することはない。

二人は一緒に階下へ降りた。

通路にいた男は、この建物で開業している医師の名前を掲げた案内を読んでいた。二人が近づくと顔を上げた。リアンは何か用かと尋ねた。

男はリアン医師かと確認した。

「そうです」

前の晩の照会の続きで来たのだと男は説明した。いつなら彼女と話ができるか知りたいという。

リアンは別の施設での予約のため出かけるところで、戻ってからなら話ができると答えた。受付係に名前を伝えておくよう頼んだ。

男はロイを見た。ロイも視線を返した。右手は動いていなかったが、じっとさせておくには力が必要なのを感じた。

「ここの患者ですか？」と男は尋ねた。

彼より先にリアンが答えた。

「予約先へ向かうところです。照会が私の患者に関するものであれば、どの権限に基づいているのか確認させていただく必要があります」

男は二人の出発を妨げようとはしなかった。身元の確認されていない人間を拘束する任務には就いていなかった。後でまた来ると彼女に告げた。

外に出ると、リアンは手配していた車両へロイを案内した。扉が閉まるまで二人とも口を開かなかった。

「戻ってきたときに、彼が同じ指示を受けているかどうかは分かりません」と彼女は言った。

ロイは窓の外を見た。建物が背後に消えていった。

「私にも分かりません」

07 — 証人となる代償

M-06は自治体の一覧で、ある医師の住所を見つけていた。その診療所を選んだのは、誰かに勧められたからではなく、直接訪れて問い合わせができると一覧に記されていたからだった。午前の診察が終わる少し前に到着した。

受付係は彼女に座るよう促した。少しして、氏名と連絡先の住所を記入する用紙を渡された。

最初の欄にM-06と書いた。二つ目の欄を見つめた。地方施設に配属されてはいたが、管理部門の職員によって身元が確認されていない人物からの郵便物を、そこで受け取る許可があるとは思えなかった。

医師と話す前に用紙の記入を終える必要があるかと、受付係に尋ねた。

女性は、情報の一部については診察の後まで待ってもよいと答えた。それから、何と呼べばよいかと尋ねた。

M-06は、書いた識別番号が自分の使う唯一の名前であると伝えた。

女性はその答えを受け入れた。

待合室では、男が小型の電子機器をいじっていて、その隣に座った子供が見守っていた。子供は音が出なくなったと訴えた。男は機器を調整して彼女に返した。

M-06は少しの間それを見ていた。それから施設から離れる時間を手配した際に渡された電話を見た。画面に指示が表示されていた。投入対象の全人員に、任務に就ける状態であることを確認するよう求めていた。

彼女は確認の返信を送った。

数分後、医師が彼女を部屋へ呼んだ。何のために来たのか尋ねられ、彼女は所属機関から外出する許可は得たものの、民間の医療を受けたいという要請については、まだ決定が下されていないと説明した。

彼は特定の症状について治療を求めているのかと尋ねた。

「少し違います」

彼女は施設で受ける検査の目的を説明した。医師は耳を傾けた。話が終わると、その検査が行われる事情については詳しく知らないと告げた。相談には応じられるが、彼女が尋ねたい医学的な疑問のいくつかについては、手元にない情報が必要かもしれないという。

彼女は、ここで相談したら所属機関に報告書を書くのかと尋ねた。

「そうする義務があるか、あなたが求めない限り、書きません」

「あなたに義務があるかどうかは、どうすれば分かるのですか？」

医師は、医師が情報を開示しなければならない場合もあると答えた。その例をいくつか説明した。彼女は雇用主からの照会について尋ねた。雇用されているという事実だけで、誰かに彼女の診療記録の写しを入手する権利が生じるわけではないと、医師は答えた。

彼女は次の質問もせず、しばらく座っていた。

それから、捜し出すよう指示された男について話した。医師には男の居場所も、彼女が働く施設の名前も伝えなかった。男が負傷しており、自分に与えられた指示によってさらに負傷する可能性があると認識していたことを話した。彼女は指示を出した人々が期待するやり方では、その指示に従わなかったのだ。

「あれは医学的な判断だったと思いますか？」と彼女は尋ねた。

医師は、負傷について判断を下すには何が起きたのかをはるかに詳しく知る必要があると答えた。しかし、彼女が問いかけているように思えるのは、負傷だけにとどまらない問題だった。

「あなたには選択肢があると信じていましたか？」

「私は選択しました」

「それとは少し違います」

彼女は考えた。ロイがホームから立ち去るのを許すことができたのは、彼を妨げないという判断を下せる一瞬があったからだ。そのような一瞬が再び与えられるかどうかは分からなかった。

医師は、所属機関に戻るのが怖いのかと尋ねた。

彼女は建物が怖いのではないと答えた。そこにいる人々も、彼らの仕事も知っていた。分からないのは、次に自分自身の判断を下したとき、その判断を持ち続けることが許されるかどうかだった。

医師は彼女が言ったことを何か書き留めた。彼女が求めると、その言葉を見せてくれた。

相談が終わりに近づいた頃、電話に新しい指示が表示された。人員は施設へ戻ること。彼女は到着しなければならない時刻を読んだ。

「もう行かなくては」と彼女は言った。

医師は次の予約を取りたいかと尋ねた。

再び施設を離れる時間を手配できるかどうか分かったら電話すると、彼女は答えた。

受付で相談の料金を支払った。受付係は領収書と診療所の電話番号が記されたカードを渡した。彼女はそれらを地方施設の医師から渡された所見と一緒にしまった。

施設に戻ると、会議室へ向かうよう指示された。M-04もそこにいた。画面に上層地区の地図が表示されていた。政府の照会に関係すると考えられる医療機関として、いくつかの住所が示されていた。

その一つは、彼女が今しがた出てきた建物だった。

彼女はなぜその住所が含まれているのか尋ねた。係官は、民間の紹介制度に参加していることから、その施設が特定されたのだと答えた。対象者がそこへ行ったことがあるという事実は確認されていなかった。

「そこへ行った人々は、自分の診察について尋ねられたのですか？」と彼女は言った。

係官は、文民当局が得た情報を評価してから人員に次の指示が出されるのだと答えた。

彼女はM-04の隣に座った。彼は医師に会えたのかと小声で尋ねた。

「ええ」

彼は地図を見た。彼女もその視線を追った。

説明を担当する係官には、画面上のどの住所も彼女に結びつける理由はないと分かっていた。それでも初めて、自分だけに関わる事実を司令部に明かしたら、何が起きるのかと考える理由が生じていた。

08 — 最後に残された部屋

診断施設での検査には、医師が予想していたよりも長い時間がかかった。午後も終わりに近づく頃、彼はリアンを脇へ呼び、損傷の程度を明らかにするには結果が不十分だと説明した。ただし、より詳しいことが分かるまで、負傷した腕をこれ以上使わないよう勧める根拠にはなるという。

リアンはロイを一晩その施設に入院させることはできないかと尋ねた。医師は入院診療に対応できる設備はないと答えた。別の病院に空室を用意できないか問い合わせると申し出た。

二人の医師が手配について話し合っていると、職員がやって来て、他の施設に代わって最近行った検査に関する照会が管理部門に届いたと伝えた。照会には過去七日間の記録を保全するよう求める要請も含まれていた。

個々の患者の名前は記されていなかった。

医師は、記録の提出を求める追加の要請が届いているかと尋ねた。職員は届いていないと答えた。

彼は照会を保管し、施設の記録管理責任者に回すよう職員に伝えた。それからリアンの方を向いた。

「患者と話をしなければなりませんね」

ロイは検査区画の隣にある小部屋にいた。目の前のテーブルには水の入ったグラスがあった。医師同士が話している間、待つように言われていたのだ。

リアンは結果と自分の勧告について説明した。新たな照会のことを伝え、休む場所が必要だと言った。他で入院できるよう手配してみることはできるが、彼が訪れた二つの施設に届いたような照会が、別の施設には届かないとは言えなかった。

彼は礼を言った。リアンには、彼がこれから帰ってもよいかと尋ねようとしているように思えた。

しかし彼は代わりに、その部屋から協会に電話できないかと尋ねた。

リアンは彼が使える電話を見つけ、彼を一人にした。

協会ではミンが法務委員会のための補足陳述書を準備していたとき、電話が彼女に転送された。声を聞いて誰だか分かった。レイチェルが彼宛てに伝言を残していたと告げた。

レイチェルが書いた通りに、それを読み上げた。

ロイは何も言わずに聞いていた。病院から送られた文書を協会はまだ保管しているかと尋ねた。ミンは保管していると答えた。彼はレイチェルに泊まる場所があるかと尋ねた。

「今のところ宿泊先はあります。その手配が今後も変わらないとは約束できません」

彼は理解したと言った。

ミンはレイチェルに伝えてほしいことはあるかと尋ねた。

ロイは水の入ったグラスを見た。グラスには光が反射していた。何日もレイチェルと話したいと思っていたというのに、明日起きる出来事で事実ではなくなってしまうことのない言葉を考えるのは、今になって難しかった。

「検査を受けたと伝えてください」と彼は言った。「今は何を調べるべきか知っている人がいると」

ミンは書き留めた。

「それから、また電話してほしければ、何とかしてみると」

電話を置きかけたとき、ミンはもう少し後にレイチェルが協会へ来る予定だと告げた。その時まで連絡できる状態でいられるかと尋ねた。

ロイは扉を見た。廊下でリアンが誰かと話していた。言葉も相手の声もはっきりとは聞こえなかった。彼は病院で行った、自分の身体に何がなされることを望むのかを明確にした陳述を思い返した。あまりに何度も陳述を繰り返さなければならなかったため、人生で何をしたいかを説明することに、実際にそれをすることよりも長く時間を費やしてきたと感じるときがあった。

「聞いてみます」と彼は答えた。

リアンが戻ってくると、ロイは法律顧問が言ったことを伝えた。彼女は、もう一時間その部屋に留まってもよいか医師に尋ねると申し出た。医師は承諾した。その晩、そこで他の検査を行う予定はなかった。

医療協会の入る建物では、レイチェルが、今後自分が調査に参加できなくなった場合に記録がどこに残るのかを明らかにするための陳述書に、研究資料の保管先の住所を記入していた。滞在していた部屋の住所は含めていなかった。建物の所有者は居住者の氏名を求める通知にまだ回答していなかった。

彼女はコートと、そこに戻らないと決めた場合に必要となる物を入れた小さな鞄を持ってきていた。

陳述書に署名しているとミンが部屋に入ってきた。ロイから電話があり、伝言を頼まれたと告げた。それをレイチェルに読み上げた。

レイチェルはペンを置いた。

「彼と話せますか？」

「しばらく連絡できる状態でいてもよいか確認するそうです。こちらから彼に連絡できる電話番号は持っていません」

レイチェルは時計を見た。

「では、ここで待ちます」

ミンは、電話がかかってくるまでか、レイチェルが帰ると決めるまで、協会に残ると言った。自分の事務室へ戻り、夜間の電話対応を担当する職員に、自分で受けたい電話がかかってくるかもしれないと伝えた。

司令部では、デレンがその日行われた照会の概要を受け取った。今後さらに記録を入手できる可能性のある医療機関がいくつか記されていた。捜索の拡大を担当する部門の係官は、新たな人員の投入を承認する前に、協会の通信を調査するよう勧告していた。

大尉は、対象者の信頼できる目撃情報が届いたかと尋ねた。

連絡係官は、まだ何も確認されていないと答えた。

デレンは再び勧告を見た。実力行使に関する指示には何の変更もなかった。独立した診察の手配について彼が尋ねたことにも、回答はなかった。それなのに今や、一人の男がそのような診察を手配する手段までもが、司令部に監視の方法が提案されている対象の一つとなっていた。

報告はどの施設についても対象者の存在を立証するものではない、と彼は記した。その違いを以後の評価でも維持するよう求めた。

陳述書を送信した。それを次の作戦を遅らせる理由と考える者がいるかどうかは分からなかった。

診断施設の小部屋で、ロイは時計の長針が約束の時刻へ向けて動くのを見ていた。部屋にベッドはなかった。椅子とテーブル、別の建物の側面に面した窓があった。その一時間の残りの間は、誰もこの部屋を必要としないはずだった。

別々の道を歩み始めた日以来、レイチェルに会っていなかった。彼女を見つけるのは、二人で次に何をするか決める時間のある場所だと想像していた。

もう、そのような場所が見つかるとは思っていなかった。

それでも、まだ電話があった。そして時計には、まだ時間が残っていた。

第07章 終。